国立国語研究所学術情報リポジトリ

上級日本語学習者に対するポジショニングマップを用いた語彙指導：印象・感想を述べる手段としての形容詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): vocabulary instruction, positioning map, adjectives, feeling, impression 作成者: 黒崎, 誠, 黒崎, 亜美, 播岡, 恵, 丸山, 伊津紀, KUROSAKI, Makoto, KUROSAKI, Ami, HARIOKA, Megumi, MARUYAMA, Itsuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001897

研究ノート

上級日本語学習者に対するポジショニングマップを用いた語彙指導
—印象・感想を述べる手段としての形容詞—

Teaching vocabulary using a positioning map for advanced learners of Japanese：
Adjectives as a tool to express one's feelings and impressions

黒崎　誠・黒崎　亜美・播岡　恵・丸山伊津紀
KUROSAKI,Makoto・KUROSAKI,Ami・HARIOKA,Megumi・MARUYAMA,Itsuki

要旨

上級日本語学習者に対する語彙指導の方法を検討した。取り上げたのは形容詞である。学習者が印象・感想を表現できるようになるための手段としてWarm-Cool、Soft-Hardの2軸からなるポジショニングマップを用いた。ポジショニングマップを使うことにより、学習者自身が感じた印象を視覚化でき（自己内省の補助）、かつそのマップ上に語彙を配置すれば語彙の導入もできる（語彙不足の解消）。ポジショニングマップ上に形容詞を配置した「形容詞ポジショニングマップ」を利用して印象・感想を表現する練習を繰り返した結果、学習者の形容詞使用量が増え、かつその使用に不自然さがなくなった。

キーワード：上級の語彙指導　ポジショニングマップ　形容詞　印象　感想

1. はじめに

本研究では、印象·感想を述べる際の手段として形容詞に注目し、その使用も含めた総合的な語彙指導を試みた。本研究で対象とするのは、いわゆる上級学習者である。上級で必要とされる語彙は多岐にわたり、また抽象性が増すため初級・中級とはおのずとその導入法が変わる。水谷(1980)は、中・上級の教育では、語彙の増大をはかることが非常に大きな要素であるとした上で、問題点として、語彙の与え方、文体の違い、価値観の違いの3点をあげている。

しかし、具体的な語彙導入および練習となると、その提案はまだ少ない。上級レベルを通しての語彙教育の体系的な提案にいたってはほとんどない。語彙の増大が必要であるという認識はあるものの、そのための具体的な方法がないというのが上級の語彙教育の現状である。

文法教育はレベルの上昇につれて密度が小さくなるのに対し、語彙教育はレベルの上昇につれて密度が大きくなる（国立国語研究所 1985）。また、学習者の専門に

よっては必要な語彙の特殊性も増していく。したがって、語彙そのものに注目するならば、すべての上級学習者の必要性を満たす語彙教育を体系化するのは不可能である。しかし、語彙習得のすべてを学習者に委ねてしまうのも効率が悪い。学習者に提示する語彙は体系化できないとしても、それを整理するための方法は提示できるのではないだろうか。

本研究で形容詞を取り上げたのは、上級学習者でも印象・感想がうまく言えないという経験があったためである。印象・感想がうまく言えない原因として、①使用語彙の不足、②自分自身が感じたことに対する日本語での分析力の不足の2点を考えた。

そこで、この2つの不足を解消するために学習者が感じたことや考えたことを何らかの方法で目に見える形にし（②の解消）、かつ印象・感想を適切に表現するために有効な語彙・フレーズを指導する（①の解消）こととした。その手段として、本稿ではポジショニングマップを用いた語彙指導を提案する。また、ポジショニングマップが語彙の整理に有効であることも示す。

2. ポジショニングマップの意義

2.1 ポジショニングマップとは

ポジショニングマップ（以下ＰＭとする）とは、数値で表しにくい物事の特性を感覚的に表現するための方法の一つで、任意の評価軸を縦軸、横軸においた2次元の図である。ある物事に対するイメージを評価軸に沿って分析し、マップ上にプロットするため、イメージを視覚的に把握することができる。ＰＭによって言葉や数値には表しにくい主観的なイメージを客観的に処理することが可能になる。現在、広告のプランニング、各種デザインなどのクリエイティブワークの世界では他者にイメージを伝える手段として、ごく一般的に用いられている。

2.2 ポジショニングマップの活用

ＰＭを日本語学習、中でも語彙学習に利用する場合、プロットしたイメージを言語に置き換える過程が必要になる。そのため、単に軸が設定されているだけのＰＭではなく、マップ上に適当な語彙があらかじめ配置されているものが必要となる。

そこで注目したのが「言語イメージスケール」（小林 1990, 2001）である。これは、人々が色に抱く共通のイメージを明らかにしてWarm-Cool、Soft-Hardの2軸からなるＰＭに配置した「カラーイメージスケール」（単色のものと配色のものがある）を基に、そのイメージを的確に表現する語彙を挙げ、同じくＰＭ上に配置した

ものである。

この言語イメージスケールを日本語学習に応用し、Warm-Cool、Soft-Hardという評価軸の上に上級日本語学習者に必要な形容詞を筆者らの基準で配置およびグループ分けして、「形容詞ポジショニングマップ（以下形容詞ＰＭ）」を作成した[1]。例えば、WarmとSoftの強いイメージの形容詞なら「かわいい」というグループとして左最上部に位置し、逆にCoolとHardの強いイメージの形容詞なら「フォーマル」というグループとして右最下部に位置する。図１は、プラスのイメージを表現する形容詞ＰＭで、これ以外にも配置する形容詞によって各種の形容詞ＰＭが作成できる。

ＰＭを日本語学習に応用する利点は以下の3点である。

（１）イメージが視覚化できる。

自分自身の感覚・感性を視覚的に把握することで、目に見えない感覚を客観的に捉えることが可能になる。そして、それを他者と共有することでコミュニケーションおよび相互理解のきっかけを作ることができる。また、学習者と教師の間にＰＭという共通の道具を置くことで、教師は適切な助言を与えることができる。例えば、ある形容詞について“学習者が不自然な使用をしている”と教師が感じるとき、それが、学習者が語彙の意味を誤解していることに起因するのか、学習者と教師との感性の違いによるのかがＰＭを使用することで見分けられる。

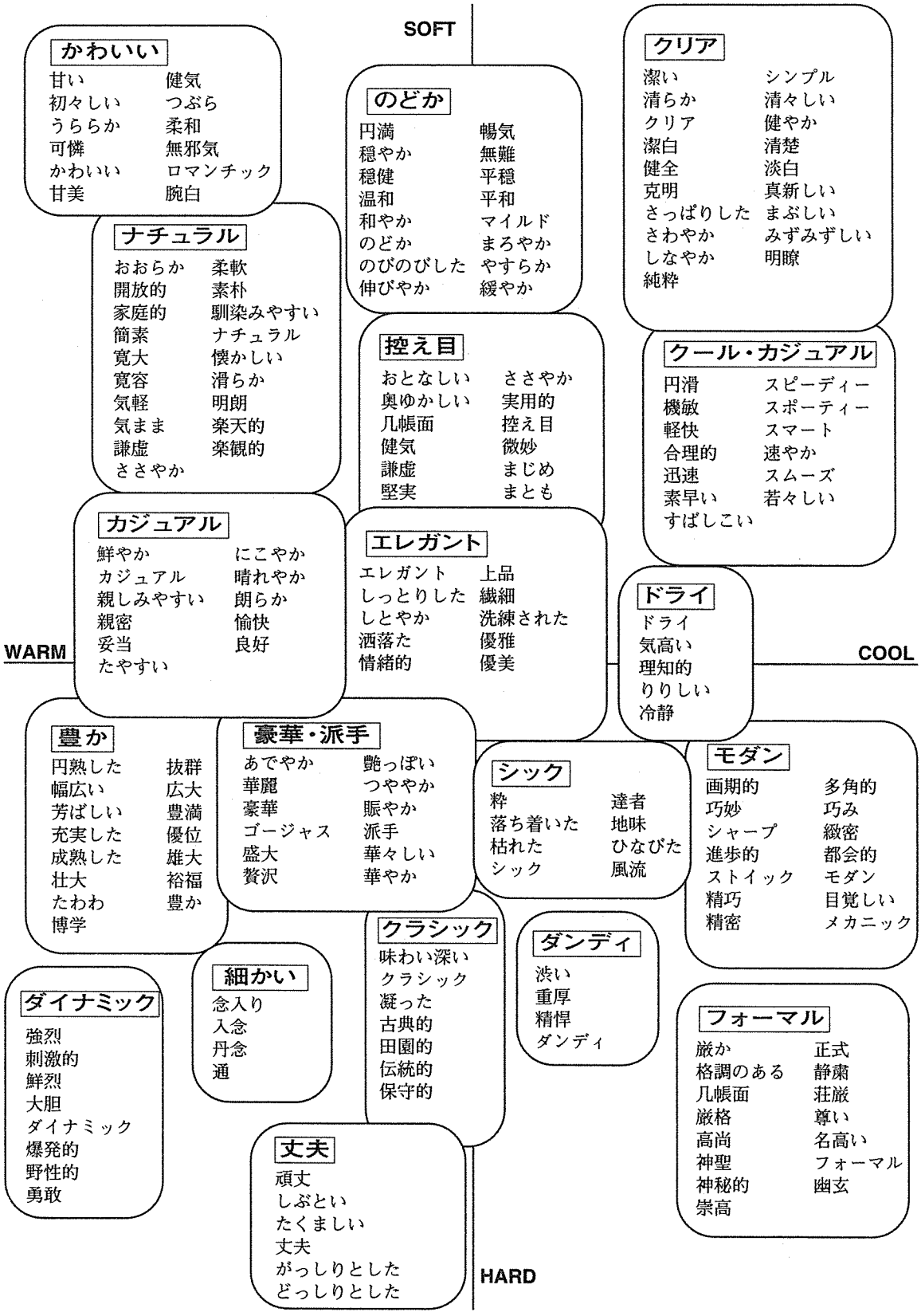
（２）既知の語彙を整理する基準になる。

中・上級の学習者には、理解語彙であっても使用語彙になっていない語彙が多くある。使用語彙はある程度学習者の頭の中で整理して記憶されているとしても、理解語彙はその整理が不十分である可能性が高い。それらの既知ではありながら使用できない語彙を整理し、分類することがＰＭを用いることで可能となる。

（３）語彙理解の助けになる。

例えば、形容詞ＰＭの場合、形容詞の属するグループの位置などから、おおまかではあるがその形容詞のもつ概念を把握することができる。

また、（２）（３）によって、学習者の日本語教育課程修了後までも視野に入れたカリキュラムの作成が可能となる。ＰＭは既存の語彙教材のように語数と意味が固定されたものではなく、学習者の興味や経験および感性によっていくらでも語彙の補充、ＰＭ上の位置の修正が可能だからである。授業においてＰＭの利用法を経験すれば、修了後、教師の手助けがなくてもＰＭを活用して語彙を増大させることができると思われる。



［図1：形容詞ポジショニングマップ（プラスイメージ）］

3. 形容詞ポジショニングマップを用いた語彙指導

ここでは特に形容詞ＰＭを用いて、２章で述べたＰＭの意義をどのように語彙指導に応用するかについて提案する。形容詞ＰＭを用いた語彙指導の流れと、内容を図２に示す。

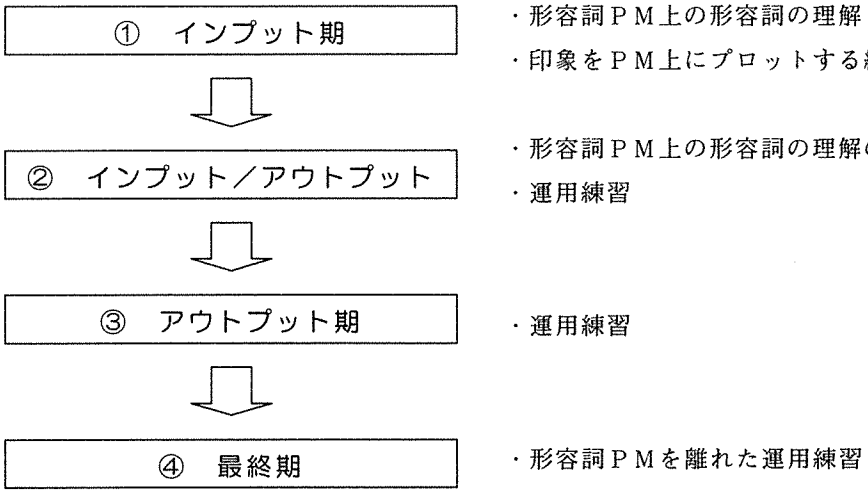
以下、図２の内容にしたがって具体的な指導の流れについて説明する。

①インプット期

まずマップ上のある領域のイメージを想起させるような視覚教材（例えば、写真、VTRなど）を補助として用い、それと例文を組み合わせる形で授業を行う。視覚的な補助を行うことにより、似た概念を持つ形容詞同士の相違点に着目しやすくなる。また、例文中心の導入ではどうしても活動が単調になりがちだが、イメージを想起させるこの方法によって形容詞の導入授業はより活発で能動的なものへと変わりうる。この時期は、形容詞ＰＭ上の形容詞の意味を理解するとともに、印象をＰＭ上にプロットする練習の段階でもある。

②インプット／アウトプット期

ここでは視覚教材および視聴覚教材を補助としてではなく印象・感想を述べる素材として使用される。例えば、CM、ドラマのオープニング映像、雑誌広告を見て印象・感想を述べる活動、トーク番組を見て印象・感想を述べる活動などである。前者の素材はもともと見る者に何らかの印象を与えることを目的として作られたものであり、後者に比べ印象・感想は比較的表現しやすい。したがって、運用練習では



［図２　形容詞ポジショニングマップを用いた語彙指導の流れ］

まずＣＭ等を素材として用いたのち、トーク番組を利用するのが有効であると思われる。

この段階で学習者は、形容詞ＰＭを傍らにおき、アウトプットの際にその中の形容詞を積極的に使うことを求められる。この活動および教師によるフィードバックを通して、学習者は生成における形容詞の選択、つまり似た形容詞の微妙な差異について詳しく学習することになる。

教師は素材となる映像を選ぶ段階で学習者に使ってほしい形容詞をある程度想定することはできる。しかし、当然どう感じるかは学習者に委ねられるため、教師の思いもよらない形容詞を学習者が選択する場合もある。その際、教師と学習者の間に形容詞ＰＭという共通の媒体が存在することが役立つ。形容詞ＰＭを見ながらその言葉の選択理由について学習者と話し合うことで、選択の過程を理解することができるからである。

③アウトプット期

ここでは映画、ドキュメンタリーなど、印象・感想を述べることがより難しくなる素材が使用される。この段階になると多くの学習者は徐々に形容詞ＰＭに頼らなくなってくる。形容詞ＰＭを見てはいるが、その中の形容詞にとらわれず、自分の感覚に合った形容詞もしくは“形容表現”（例えば、擬音・擬態語、「哲学的」「抽象的」などの「名詞＋的」、「～のような」など）を自由に使い始める。

学習者によっては、雑誌などで見つけた形容詞を自分で形容詞ＰＭ上に配置している者もいた。例えばある学習者は、若者向けのファッション雑誌から「とっぽい」という形容詞を見つけ形容詞ＰＭに書き込んでいた。それは、写真のキャプションに使われていたもので、その写真から受ける印象で「とっぽい」の意味およびニュアンスを理解したとのことだった。このように、この段階での形容詞ＰＭは学習者にとって印象・感想を表現する際の補助だけではなく、自身の感覚を確認するための道具にもなっている。

④最終期

ここでは形容詞ＰＭにこだわらない授業が行われる。この授業では、軸を自由に設定したＰＭを用いる。そのときに見た映画やドキュメンタリーの内容に応じて評価軸を設定し（例えば映画のストーリーに関して述べるなら、「明るい－暗い」「易しい－難しい」など）、それを印象･感想の表現に活用する。

以上が形容詞ＰＭの利用法および語彙指導の方法である。このように形容詞ＰＭの使い方は一様ではなく指導段階によって異なる。

また、第二言語習得における語彙学習は、語彙の使用法の習得であると同時に語彙そのものを記憶する作業でもある。コーエン他（1989）では、いわゆる短期記憶に一時的に保持された情報は、一定の処理（リハーサル）を受けたのちに長期記憶に格納され、半永久的に保存されるという（ほかに大平 1997，奥村 2001など）。学習者はインプット期、インプット／アウトプット期までで形容詞ＰＭ上の形容詞を繰り返し目にする機会を持つ。このことから見ると、インプット／アウトプット期までの学習には運用のための繰り返し練習としてだけではなく、形容詞の記憶促進としての効果も期待できる。

4. 形容詞ポジショニングマップを用いた語彙指導の実践的検討

ここでは３章で提案した指導方法を実践的に検討する。本稿では、図２の”インプット／アウトプット期にあたる２つの課題の実践例を取り上げ、そこでの学習者の変化について分析する。この時期は運用練習を繰り返し、形容詞の理解と使用の両面を取り扱っている。したがって、学習者のアウトプットの変化が顕著に現れている。

なお、ここで紹介する作文を書いた学習者はすべてラボ日本語教育研修所の上級クラスに在籍していた学習者で、日本語学習時間は1500時間以上である。

4.1 トーク番組を用いた授業の実践例

インプット／アウトプット期が形容詞ＰＭを見ながら形容詞をピックアップする時期であることはすでに述べた。言い換えれば、学習者が形容詞をピックアップしなければ学習の意味がなくなってしまう。しかし、形容詞ＰＭを脇において、学習者に「形容詞を使って印象を書いて（言って）ください」と言ってもなかなか思うようには使えない。そこで、例えば、まずいくつかの単語を話し合ってピックアップし、それを使うように指示する、または作文（スピーチ）の構成を決め、どの部分で形容詞を使えばいいかをあらかじめ提示しておいてから活動に入るなど、手順を具体的に示すのがここでは有効である。

次に示す２作文は、同一学習者のもので、どちらも『トップランナー』（NHK制作のトーク番組。）を視聴した後に書かれたものである。形容詞ＰＭに載っている形容詞（作文中□で示す）と載っていない形容詞（作文中＿＿で示す）とに分けて示す。この授業は、「トーク番組を視聴し、見たものの印象を口頭で言える、文章で表現できるようになる」という目標で行われ、ＶＴＲ視聴に約45分、その後の記述に30～45分を要した。作文の長さは約300字で、内容には１）第一印象、２）感動

した出来事や発言、3）見終わったあとの印象の変化を盛り込むように指示した。なお、作文①と②の間には約2か月の期間があり、その間週1回の割合でこの授業が行われた。本稿の作文はすべて原文のままである。

学習者A（国籍：韓国　20代女性）

作文①　2001年7月記述

トップランナー「女優：松たか子」

松たかこを初めて見た時には顔がふっくらで瞳がきらきらとする同時につぶらな瞳を持つ女に見えた。いつもにこにこしている顔つきは彼女をやわらかな女の子ではないかと印象を与えてくれた。逆に、大人っぽい言い方とストレートである髪形は彼女の印象を冷たくした。子供のころからずっと俳優の道を歩いてきたことを見れば真面目な人だという気がする。初めには劇場で演技を始めて、後にはテレビと映画と歌手まで手を延ばして活動を広めていった。そんなことを見れば彼女は自分だけがもっている魅力がありそうだ。結婚についてもはっきりな考えをもっていることを見れば未来よい俳優と歌手と妻になると私は信じている。

作文②　2001年9月記述

トップランナー「テルミン奏者：竹内正実」

竹内を見た第一印象は顔づきがまるで隣のおじさんみたいに感じられた。だから親しみやすい人ではないかという気持ちだった。派手な姿はどこにもみつけられなかった。顔づきから漂う落ち着いている感じ。テルミンも初めて会ったにもかかわらず馴染みやすい楽器だった。音はまるで人間の鼻歌を浮かべる音だった。テルミンで出てくる音は味わい深い演奏だった。だが、楽器の内部を見るととってもシンプルな仕組みだ。少さなテルミンから大きなものまであったがその音は全然かん違った。テルミンが現われてきて８０年しか過ぎなかったが、そのうちに大勢な人から演奏された。初めては不気味に響く音のせいかＳＦ映画にちょくちょく使われた。竹内は少さい頃から音楽に関心があって２５才頃、仕事を辞めてロシアへ行った。周りの人から反対の意見が出たがそんな話を言われば言われるほど頑張っていた。彼の演奏を見ながら線もなしで体の動きだけでうまくいくことが偉いように見えた。テルミンを演奏する彼の上品な顔だちは他人を気楽にしてくれた。

この作文を読んでまず気づくのは、形容詞ＰＭ上の形容詞の使用数の増加である。作文①と②を較べると後者のほうが、学習者に「形容詞を使おう」という姿勢がより強く感じられる。

しかし、まだこの段階では若干不自然さを感じる使い方も見られる。例えば、3行目の「馴染みやすい楽器」は日本人があまり使わない表現だろう。このような語彙使用の不自然な部分は、フィードバックの際に学習者と話し合った上でより自然な表現（この場合は、例えば、「親しみやすい」など）に変えるという作業が行われる。

使用語彙の質的変化もみてとれる。使用された形容詞を一つひとつ見てみると、

作文①で使われている語彙は「冷たい」「やわらかい」など、学習者にとって比較的使い慣れた初中級レベルの形容詞であるのに対し、作文②になると「馴染みやすい」「味わい深い」など、上級レベルになってから学習した形容詞の割合が高くなっている。

4.2 雑誌広告、絵画を用いた授業の実践例

この授業は、「雑誌広告および絵画を見て、印象・感想を言える、文章で表現できるようになる」という目標で行われた。作文は、「見たもの（雑誌広告、絵画）の描写」と、「印象・感想」とを分けて（各200字）書くように指示した。「印象・感想」の部分で形容詞を使うことになっている。2人の学習者による「印象・感想」を書いた作文を以下に示す。

学習者B（国籍：韓国　20代女性）

作文③　2002年10月16日記述

雑誌広告（コニカ・デジタルカメラ　Digital Revio）

デジカメだからパット見て最初はメカニックとシャープ、精密な感じを受けてます。両手がカメラをつないでいるので世代の連結。ふたつの技能を持っている画期的と進歩的な技術の発展が目覚しい。デジカメラは全体的なイメージは都会的でモダンだ。両手のイメージは初めは技術じゃなくて広告して消費者の階層を拡大される巧みの広告効果があるそうに見える。

作文④　2002年11月20日記述

絵画（ルネ・マグリット作　「光の帝国」）

ぱっと見た瞬間は平穏で田園的だと感じた。上の空はただ昼のイメージであまり印象的じゃないけど下の夜の部分は闇が立ち込めている中に小さな街灯が強烈なインパクトを受けた。闇の中で希望、期待、夢を待っている感じ。ぼんやり輝いている街灯が二つ。実際の街灯と小川に映し出された街灯。絵の一部分だが光の印象が穏やかで渋い。全体に黒色を使用して光の黄色を強調。そして、絵のテーマが「光の帝国」じゃないか。

作文③では一見数多くの形容詞が使われているようだが、詳しく見てみると、すべて1つのグループのものであることがわかる（「モダン」グループ、図1参照）。印象の記述も全体的なイメージに関するものが多く、イメージの認知が大まかで自己分析（内省）が不十分であるという印象を受ける。作文④は、この授業を週1回行い約1か月後に書かれたものである。絵の各部分について整理して印象が述べられており、それにしたがって、形容詞の使われている範囲も広がっている（「のどか」

「クラシック」「ダイナミック」「ダンディ」、図１）。また、作文④では違うグループに属する形容詞が並列で使われるようになっている（例えば、「平穏で田園的」は「のどか」と「クラシック」、図１）。

学習者C（国籍：韓国　20代女性）

作文⑤　2002年10月16日記述

雑誌広告（CRICKET）

青い色は新鮮と若く感じさせた。服の素地が滑らかいよりごわごわなので、まじめでまともを感じた。機械ではなく手作りの感じで保守的、クラシックな感じだ。モデルの顔でたくましく、田園で生まれて清純な人と似う。でもひなびたというより落ち着いて渋いだ。一番感じだのは親しいた。

作文⑥　2002年11月20日記述

絵画（上村松園作　「舞仕度」）

若い少女が着た着物だが、鮮やかな色ではなく落ち着いた感じだ。かわいいと誉められるより、おとなしく見えたい少女の心が選んだ色ではないか。帯の後ろの飾りが上がって弾んでいる心が純粋だ。まるで飛んばかりの帯びの後ろの飾りが明朗な少女の魅力を叶う。欲心がないような、ただ２個のかんざしが素朴な素が親しいだ。

作文⑤も基本的に同じグループ（「控え目」「クラシック」、図１）かあるいは、近い場所に位置するグループ間での並列（「シック」と「ダンディ」、図１）しか見られない。しかし、作文⑥ではまったく異なるグループの形容詞を対比として併記し（例えば、「鮮やかではなく落ち着いた」は「カジュアル」と「シック」、図１）、自身の印象を強調している。学習者Ｂと同じように学習者Ｃも作文⑥では絵の各部分に焦点を当て、印象を分析して整理することができるようになっている。

このように、インプット／アウトプット期の活動を繰り返すことで、学習者の形容詞使用に量的、質的両面で変化が現れた。これには、形容詞ＰＭを利用したことによる効果と、形容詞ＰＭの利用方法による効果との両方が考えられる。例えば、学習者Ｂ、学習者Ｃの分析的な見方の変化は、形容詞ＰＭを利用したことによる効果ではないかと考えられる。一方、学習者Ａの量的変化は、形容詞ＰＭを見ながら運用練習を繰り返すという利用方法による効果という見方ができる。しかし、この効果の違いを明確にするためには、より厳密な分析を行う必要がある。

5.　まとめと今後の課題

本研究は、上級学習者が印象・感想をうまく言えないという問題意識が出発点だ

った。その原因が使用語彙の不足および自己分析力の不足にあるという仮定のもと、形容詞ＰＭの利用を思いついた。

そして、語彙学習を「インプット期」「インプット／アウトプット期」「アウトプット期」「最終期」の大きく４つの段階に分けた上で、形容詞ＰＭの一連の利用方法を考えた。実際に行った授業を検討すると、学習者は指導の最終段階となる「最終期」で次第に形容詞ＰＭから離れていく傾向を示していることが分かった。これは、形容詞ＰＭは見た目（第一印象）を語るには十分な語彙を備えているが、もっと深い印象・感想を言いたいときにはマップ上の語彙だけでは足りなくなってしまうことの現れであろう。これについては、日本カラーデザイン研究所の岩松氏の次の指摘は示唆的である。

> 以前、言葉を収集していたときに、文学作品から感性的な表現をとりだそうとして、必ずしも、形容詞を多く抜き出せなかったことがありました。たぶん、形容詞は「もの」の質（意味）について、感性的に使われる最もわかりやすい、シンプルな言葉なのでしょうが、より繊細で微妙な言い回しは、もっと巧みな表現方法に深化して行くことなのでしょう。(岩松 私信)

形容詞ＰＭは印象・感想の第一歩で、そこに載っている形容詞を暗記し、口に出せるようになることが本稿で提案する語彙指導の目標なのではない。自分の感じたイメージを客観的に把握できること、既知の語彙を整理、分類できることの２点が形容詞ＰＭを用いた語彙指導の利点と考えている。この２点が学習者に自律的学習をうながす要素と言えるからである。つまり、真の目標は学習者自身が自分のＰＭを作り、それが利用できるようになることなのである。

学習者のアウトプットの変化を見ると、形容詞ＰＭの利用による効果と思われるものと、利用方法の工夫による効果と思われるものが見られた。しかし、その効果の違いを明確にするには計画的なデータの収集と分析が必要である。これは今後の課題とする。それに加え、形容詞ＰＭの妥当性の検討、学習者の受け止め方および利用の仕方に関するデータの収集等が必要である。そうすることによって、ＰＭを用いた語彙指導の可能性をさらに発展させると同時に、より信頼度の高いものとする努力を続けていきたい。

謝辞

言語イメージスケールの本稿に示したような利用を承諾してくださった(株)日本カラーデザイン研究所に感謝申し上げる。また、(株)日本カラーデザイン研究所の小林重順所長、岩松桂氏、筑波大学の卯城祐司先生、千葉大学の吉野文先生には数

多くの貴重なご意見をいただいた。深く感謝申し上げる。本稿は平成13年度国立国語研究所日本語教育上級研修で得られた成果の一部である。

注

1　図1の形容詞ＰＭに配置した形容詞は、日本語能力試験1級レベルを基準とした。『1万語語彙分類集』（専門教育出版）から印象・感想につながり、プラスイメージの形容詞を中心にピックアップした。

参考文献

大平英樹(1997)「認知と感情の融接現象を考える枠組み」海保博之編『「温かい認知」の心理学』9-36，金子書房.

奥村訓代(2001)「ディスコースの認知」平澤洋一編『日本語教育学シリーズ第5巻 認知文論』139-182，おうふう.

コーエン，G.，M.W.アイゼンク，M.E.ルボワ著　長町三生監修　認知科学研究会訳(1989)『認知心理学講座1　記憶』海文社.

国立国語研究所(1985)「語彙教育—内容と方法—」国立国語研究所『日本語教育参考書13　語彙の研究と教育(下)』163-169，大蔵省印刷局.

小林重順(1990)『カラーイメージスケール』講談社.

小林重順(2001)『カラーイメージスケール改訂版』講談社.

専門教育出版(1998)『改訂　品詞別・A～Dレベル別　1万語語彙分類集』専門教育出版.

水谷信子(1980)「中・上級の話しことば教育」『日本語指導参考書7　中・上級の教授法』53-102，国立国語研究所，大蔵省印刷局.